

II. 髓 K+黄色, PD+丹赤色, 成分ウスニン酸, ステクチン酸

個体数の割合は I の方が II よりも断然多数で一群落中に両者共存して居ることは屢々あり稀に一群落 II のみよりなることもある。又一度反應で區別してからよく観察すると外形的にも明かに差があり後には試薬なしにピンセットで撰り分ける事も可能となる。そこで *U. ceratinella* のタイプの写真を見るとこれは *rubescens* の方の形であるので *ceratinella* と云う名は不用となる。然し上記の調査で *rubicunda* も日本に産することが判明した。此兩種の日本に於ける分布は何れも暖地生で従来 54 箇所の産地から見ると最北は陸前栗原郡花山村と佐渡を連ねる一線(北緯約 39°)と考えられて居たが最近館脇博士及び富樫誠氏は釧路厚岸から根室へかけて暖流の影響を受ける太平洋沿岸に發育することを発見した。

今回新種として発表した *U. dorogawensis* は昨年大和山麓洞川宿の龍泉寺で富樫誠君が採集した多量のアカヒゲコケの中から十数個体を撰別したもので其後紀州高野山の採品中からも発見された。全体小形で分枝の方法や粉芽の附着状態が異り又赤色素のある場所が前の2種のように皮層の菌絲でなく髓の外縁の膨脹した菌絲に存する。此点で *rubescens* や *rubicunda* の所屬する subsection *Rubigineae* Motyka ではないが暫く便宜上一所に記述して置く。

〇ブコウマメザクラ (原 寛) Hiroshi HARA: On a variety of *Prunus incisa* Thunberg

秩父武甲山の中腹以上の石灰岩地に一寸変つたサクラが見られる。これは白井光太郎先生の頃(1892年)からマメザクラとされてきたが、近年ブコウタカネザクラ(本田1937)の名が興えられた。昨春4月20日山崎敬、富樫誠両氏は花の標本を多数採集され、更に本年5月私も現地で注意して観察した結果、マメザクラ系のものである事が確かになった。タカネザクラとは葉柄の毛が伏臥して居り、葉縁の鋸齒の先端に目立つた腺がなく、葉身基部の両側に腺を有し、花梗が短いなどの点で明かに異つている。マメザクラの普通形からも、葉が大形で廣倒卵形を呈し通常長さ5-8cm幅3-5cmあり、成葉は殆ど無毛である点で少しずれている。葉柄は個体により殆ど無毛か又は伏毛を有している。

武甲山の山麓地帯にはチョウジザクラ、カスミザクラ、ヒガンザクラ、ミヤマザクラが見られるが、ここに問題としたサクラはこれが山の中腹以上に多数生育しその性質もほぼ一定している事やよく結実する事などから雜種起源のものとは思われない。同山には箱根、丹沢、三ッ峠或は妙義山とはほぼ同一又はよく似た組成のフロラが見られ、かえつて附近の山地には見られない多くの種類が産することが知られて居り、このサクラも亦マメザクラが武甲山に可成り古くから隔離され孤立して他地方のものから少し変つた形に分化したものと考えられる。和名はブコウマメザクラと改めたく、学名は次の如く組合わせる。

Prunus incisa Thunberg var. *bukosanensis* (Honda) Hara, comb. nov.

P. nipponica Matsumura var. *bukosanensis* Honda in Bot. Mag. Tokyo 51: 56 (1937).